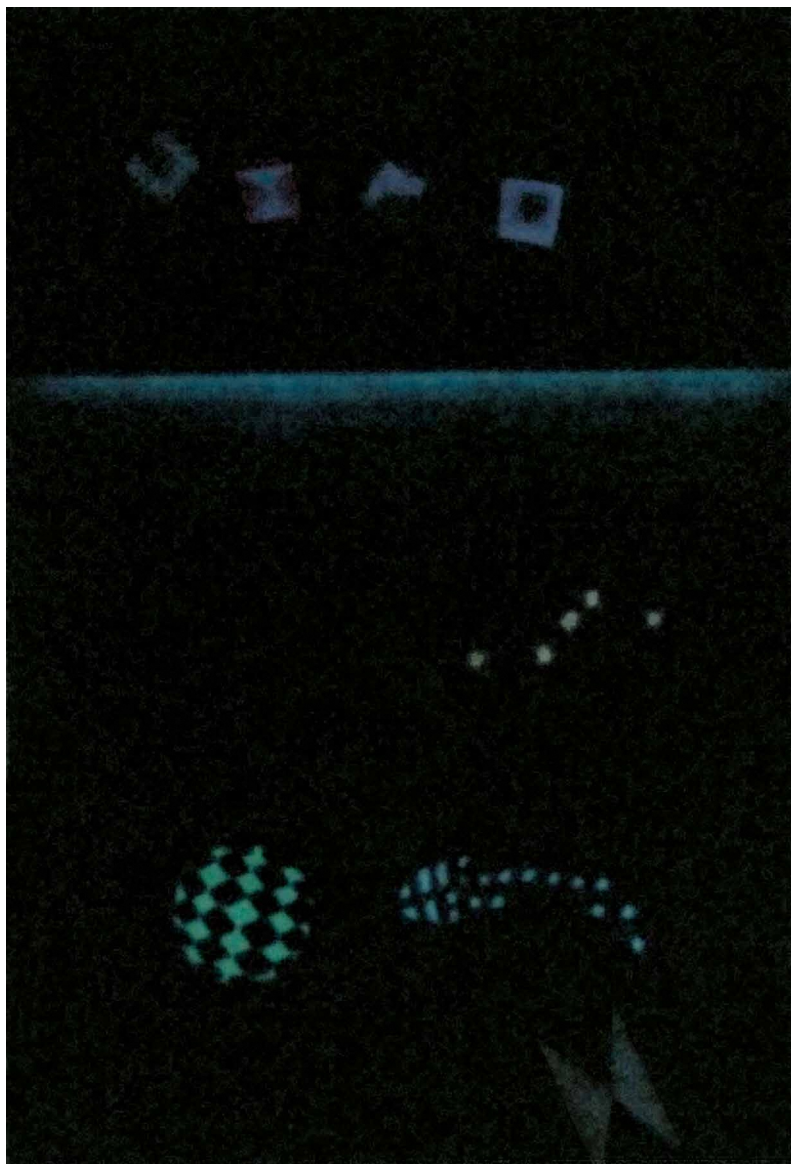


# アマリリス Amaryllis

静岡県立美術館ニュース

THE JOURNAL OF SHIZUOKA PREFECTURAL MUSEUM OF ART



二見彰一（一九三二〜）

《海のうた》

一九六九年

紙、アクアチント

二二・九×一五・六cm

二見彰一は、戦後日本の銅版画界を牽引してきた作家の一人。自身の主要な色をブルーと決めており、まず黒を刷ってから、青を重ねることで、独特の深みを持つ色調を作り上げている。しかも色が混じり合うのを防ぐため、黒を刷った後、一旦紙を乾かしてから青を刷っているのがある。「ブルーの透明さ、純粹さを得るためなら、どんな手間も惜しくない気持ちになります」と二見は語る。彼は好んで海のイメージを取り上げるが、その嚆矢となる本作品では原生動物のような不思議なモチーフが、深海を思わせる深みのあるブルーの奥行きの中に浮かび、ほのかに明滅しているように見える。

（上席学芸員 新田建史）

No.  
159  
2025年度 | 秋 |

## 静岡県立美術館の40年を振り返る 3

# 作者とは誰か

館長 木下直之

美術館をひらく勢いで、作品のみならず（前号参照）、作者もひらいてみよう。まずは、作者にひらく。アーティストはアートとイストだから、作者の方がはるかに広い。何であれ作る人は、みんな作者だからだ。しかし、実際にはそうではない。限られた人だけが「作者」と呼ばれてきた。

美術館では作品の傍にそれに関する情報を記したプレート添える。概ね、筆頭に作者の名前が上がり、ついで作品名、制作年、材質や技法、所蔵者名といった順番に記される。なぜそうなのか、ということまではあまり考えない。

私がそれを考えるようになったきっかけは、一九九五年に起こった阪神淡路大震災だった。当時、兵庫県立近代美術館（現在の兵庫県立美術館）の学芸員だった私は、被災後に調査に訪れたひとりの土木研究者から倒れた彫刻の重さを訊かれ、答えに窮した。重さを知らずに台座をデザインしたから倒れたのだと指摘された。作品は見るも

のだから、その重さは、それこそ先のプレートに記入すべき情報ではないと考えていた。

逆にいえば、現在の情報とは、来館者が必要だと学芸員が考える情報に過ぎない。そして、そこでは、何よりも作者名が最重要情報である。なぜそうなのか。

彫刻の話が出たので、ロダンについて考えてみよう。ロダンはひとりしかいないが、ロダンのブロンズ彫刻が生まれるためには、実は複数の人が関わっている。粘土による最初の形から、石膏を用いた型取り、石膏原型、鑄造作業を経たブロンズ製の形に至るまで、いくつもの工程に助手や協力者がいる。しかし、完成された作品はロダンひとりの手になるものとされる。ロダンが死んだ後に鑄造されたものであっても、作者はそれを作った人はロダンなのである。

伊藤若冲《樹花鳥獸図屏風》が当館のコレクションに加わった時、それは

「筆者不詳」だった。最初の『館蔵品図録』（一九八六年）にそう書いてあるの

で間違いない。実は、購入を検討していた時点では「伝若冲」《動物図》だった（八二年）。「伝」など曖昧な情報は避けよと主張した専門委員の意見が通った。やがて、六曲一双屏風の片割れと思われる《鳥図》が出現し（九三年）、こちらも当館に入ったことで、「伊藤若冲派」《樹花鳥獸図屏風》と名づけて公開された。その後の若冲研究の進展、若冲人気の高まりを踏まえ、二〇〇五年開催の「若冲と京の画家たち」展を機に「派」が外れた。

「派」も、あるいは「工房」という説明も正確ではないだろうし、誤解を招きかねない。同じことは作者を「若冲」としたところでも起こるのだが、少なくともこの屏風の制作に若冲が関与していたことを示している。こうした作者名・作品名の変遷については、石上

充代「伊藤若冲《樹花鳥獸図屏風》の軌跡」〔STORIES〕展図録、二二年）

を参照されたい。

もうひとつ、私の大好きなこんな話を加えよう。仏師だった高村光雲は、師匠の東雲から、上野で内国勸業博覧会とやらが開かれるから、《白衣観音》を作って出しておいてくれと頼まれた。東雲の名前で出品された観音像は、見事竜紋賞を獲得した。もちろん、受賞者は作者たる東雲、しかし真の作者は光雲、ところがふたりとも博覧会という新たな催しも、出品作品に対して賞が与えられるということもさっぱり理解できなかった。ふたりには「作者」という自覚がなかったたのである（高村光雲『幕末維新懐古談』岩波文庫）。

現代の美術館では、厳密に「作者」を探し求めるが、時と場所が変われば、「作者」はただひとりとは限らない。東雲と光雲が狐に摘まれたと感じた博覧会は一八七七年の開催、それから今日までのわずか一五〇年間に、前号で述べたとおり、美術館は作者と鑑賞者とが作品をはさんでじっくり向き合う場所となった。そこには「作者」がどうしても必要になったのである。

訂正

前号二頁三段二〇行目の「八四年」は「九四年」の誤りでした。訂正し、お詫びいたします。

## 令和八年度 四十周年記念展に向けて

## 伊藤若冲《樹花鳥獸図屏風》の秘密をさぐる

主任学芸員 薄田 大輔

来春開催予定の県立美術館開館四十周年の記念展では、館長と五人の学芸員が、これからの美術館像をめぐる、各のテーマのもと、展示を組み立てます。全七つにもわたるテーマ内、一つは日本絵画を立体的に鑑賞するというもの。平面作品である絵画ですが、実は日本絵画には絵具を盛り上げて装飾的にモチーフを表現する描法があります。県立美術館の所蔵品でも、例えば狩野探幽「一ノ谷・二度之懸図屏風」では大鎧の金具や胴などに張られた絵章の模様、狩野栄信「桐鳳凰図屏風」では鳳凰の羽毛に賦された絵具が盛り上げられています。しかし、盛り上げは一センチにも満たないことが多く、ガラス越しの展示ではもちろんのこと、画集に掲載された図版でも確認することは困難です。加えて多くの場合、絵具の盛り上げは、絵画の鑑賞と理解に大きな影響を与えないと考えら

れているためか、美術館の展示では等閑視されてきました。しかし、絵師の選んだ絵画表現の一つであり、盛り上げ自体に重要な意味を持つ作品もあります。その一つが伊藤若冲《樹花鳥獸図屏風》【図1】です。

をどのように視覚化するかというと、主に彫刻などの立体作品に用いられる三次元計測を用います。今回は木下悠氏(TOPPAN株式会社)の協力を得て、計測を行いましたので、そのデータの一部を紹介しましょう。

高低差をつけた部位があるため、盛り上げは何らかの表現方法として機能していたようです。四十周年展ではこの表現の秘密に迫りたいと思います。同展では、この高精細な三次元計測データをもとに描画する、色をとりのぞいた凹凸だけの屏風の姿の画像と、凹凸を部分的に再現印刷したプリントを公開する予定です。おそらく絵画では先例のない試みですが、新しい絵画の鑑賞体験を楽しむにお待ちください。

《樹花鳥獸図屏風》は、〈柘目描き〉という一センチ四方の方眼を引き、その内側を彩色するという逸格的な描法で描かれています。その絵具は方眼ごとに盛り上げられており、さらに場所によって高さが異なっています。柘目描きは長年議論の対象となってきましたが、この絵具の盛り上げについては研究されたことはありません。そこで、絵具の凹凸を視覚化し、公開することで《樹花鳥獸図屏風》研究のさらなる進展と、絵画の立体表現の鑑賞方法について、一つの解決策を提示することを目指しています。

では、一センチにも満たない凹凸



図1 伊藤若冲「樹花鳥獸図屏風」右隻

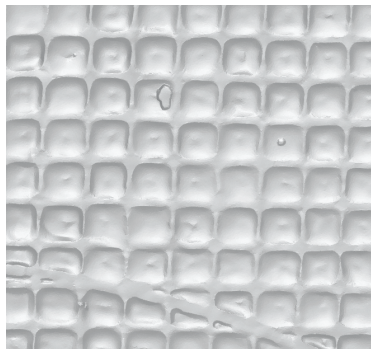


図3 拡大図

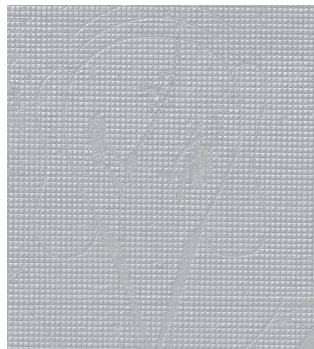


図2 「樹花鳥獸図屏風」三次元計測画像



## 「これからの風景 世界と出会いなおす6のテーマ」

### イベント報告ーゲスト・トーク・シリーズを中心に

上席学芸員 貴家映子

「これからの風景」展（九月二三日閉幕）では、当館が収蔵する風景画・風景表現を、美術を越えた異分野の知見も参考にしながら、新たな視点でとらえ直すことを目指しました。とは言え、企画したのは、あくまで美術を専門とする学芸員（本稿筆者）です。企画当初より、様々な専門の立場から風景や風景画を語っていただくことで、ようやく展覧会は補完されると考えていました。この記事では、会期中のゲスト・トーク・シリーズ等について報告します。

第一回目（七月二七日）のゲストは、会場の設計を担った建築家である桂川大氏（スタジオ大主宰）をお迎えしました。斬新なデザインの看板や、床面のリノリウムシート、四角柱などのディスプレイ一つ一つが、鑑賞者の視線や行動を誘導して、あたかも自然や都市の中を逍遙しながら作品を眺められるような空間上の工夫と

なっていたことが明かされました。

第二回目（八月二三日）のゲストである青田麻未さん（上智大学）は、英米系環境美学の研究者です。風景を静的なものとして、視覚的にのみ享受する態度を乗り越えるためのアプローチとして、自然科学の知識や知覚のミクロな変化への注目が論じられました。「風景画が提示するフレームをただトレースするのではなく、このフレームを創造するに至った画家（写真家）の身振りを作品の向こうに想像し、自分もそれを試してみる」ということが、環境を美的に、豊かに経験することに繋がるといってお話は、まさに本展の目指す風景画の楽しみ方を適格に枠付ける提言でした。この議論とも関連して、自然科学の専門家のお二人もゲストにお迎えしました。最初は、植物学を専門とされている早川宗志さんに、ご所属のふじのくに地球環境史ミュージア

ムの名物イベント「地球家族会議」を出張開催していただきました（八月十七日）。県内で実践されている世界農業遺産「茶草場農法」を例として、消費者の選択が、貴重な植物とそれらが織りなす何気ない風景の保全につながるというお話は、ぜひ心に刻みたい学びです。

ゲストトーク第三回（八月二一日）では、静岡県富士山世界遺産センターの小林淳さんに、火山学の見地から、富士山や箱根の山々の成り立ちをお話いただきました。駿河湾の深さの秘密や、富士山表面に刻まれた噴火の歴史、地層の断面から見えてくる数百年前の人びとの営みなど、飛び出す話題は驚きの連続で、今後目にする眺望すべてに壮大な大地のうごめきを想像する楽しみが増えました。

シリーズの最後（九月七日）は、都市計画・建築計画をご専門とする

静岡県立大学教授・内海佐和子さんとの和気あいあいとしたトークで締めくくられました。長年の研究対象であるベトナム、ホイアンの事例を中心に、観光地化によってもたらされる景観の変化の実態をお話いただきました。守るべき街並みの持続的な保存活用には、街が生きていることが重要と言うご指摘が印象的で、まさにこれから形づくられていく風景を自分ごととして捉えるためのタネをご提供いただきました。

ゲストの皆様にあらためて心よりの御礼を申し上げます。同展では、「親と子のための鑑賞会」や初の試みとなった「子ども創作週間」「対話でつなぐ風景鑑賞会」も実施しました。その成果や課題は、どこかで稿をあらためてご報告したいと思っています。



「地球家族会議@県美」の一コマ。北川民次《高草山風景》の一風変わった木々の表現についても意見が交わされました。

# 金曜ロードショーとジブリ展

2025年10月11日(土)～2026年1月4日(日)

「金曜ロードショーとジブリ展」が  
よいよ静岡県立美術館にやってきました。  
一九八五年にスタジオ開きをして以  
来、数々のアニメーション映画を世に  
送り出してきたスタジオジブリ。それ  
らは国内の劇場に多くの観客を集める  
のみならず、『千と千尋の神隠し』（二  
〇〇一年）を始めとして、各国の映画  
賞を受賞するなど、世界的に高い評価  
を受けてきました。

このスタジオジブリの知名度を高め  
ることに大きな役割を果たしたのが、  
同じく一九八五年に始まった映画番  
組、金曜ロードショーでした。同番組  
において、繰り返しジブリ作品が取り

上げられることで、その人気は着実に  
お茶の間に浸透していきます。一九八  
五年生まれの私もそうですが、ジブリ  
作品との出会いが、この番組であつた  
方も多いのではないのでしょうか。本展  
は40年にわたるスタジオジブリと金曜  
ロードショーの関係に焦点を当て、  
様々な資料によって両者の歩みをたど  
るものです。そして、当館にとっては  
初めてのスタジオジブリに関する展覧  
会となります。

さて、公立美術館における本格的な  
スタジオジブリの展覧会は、二〇〇三  
年の東京都現代美術館「スタジオジブ  
リ立体造型物展」に遡ります。その名  
の通り、当時公開間近であつた「ハウ  
ルの動く城」（二〇〇四年）を始めと  
する、ジブリ作品のキャラクターなど  
をもとに制作された立体造型物が展示  
されました。同年に開催された京都国  
立博物館の「スター・ウォーズ展」と  
ともに、それまでの美術館、博物館で  
は考えられなかった展覧会として大き  
な話題となりました。その後、スタジ  
オジブリに関連する様々な展覧会が企  
画され、大都市ばかりではなく、地方  
の公立館でも開催されるようになった  
ことはご存知の通りです。

このたびの「金曜ロードショーとジ  
ブリ展」は、二〇二三年に東京で初め

て開催され、  
やはり全国各  
地の公立美術  
館・博物館を  
中心に巡回し  
てきました。

いずれの会場  
でも二〇万人  
前後という驚  
異的な入場者  
数を記録して  
います。この  
数字は、「金  
曜ロードショーで親しんだジブリ」が、  
多くの人々にとって忘れがたい体験と  
なってきたかを物語っているのではな  
いでしょうか。

本展が人気を集めるもう一つのポイ  
ントは、大掛かりな体験型展示の数々  
です。例えば「風の谷のナウシカ 王  
蟲の世界」（写真1）では、巨大な蟲た  
ちを立体で表現し、「腐海」に迷い込ん  
だかのような空間で、迫力満点の造型  
を目の当たりにすることができます。

また、「魔女の宅急便」や「もののけ  
姫」などのポスターデザインを立体化  
し、セットに仕立てた「ジブリ映画ポ  
スタースタジオ」（写真2）は、作品の  
主人公になりきって撮影ができるコー  
ナーです。各スタジオでは、専任の撮



写真1（他会場の様子） ©Studio Ghibli



写真2（他会場の様子） ©Studio Ghibli

影スタッフが、入場者のカメラをお預  
かりして撮影するので、グループでも  
お一人でもお気軽に体験できます。

このように盛りだくさんの本展です  
が、エントランスホールでは静岡会場  
で初登場となる展示も予定されていま  
す。展示室のみならず館全体で、ジブ  
リの世界を体感できることでしょう。  
ジブリファンの県民の方々はもちろん  
のこと、すでに他会場でご覧になった  
という方も、この機会に当館まで足を  
お運びいただけたら幸いです。皆様のご  
来館をお待ちしております！  
※今号8ページ右下に展覧会の詳細及  
びお願いを掲載しておりますのでご  
覧ください。

（上席学芸員 浦澤倫太郎）



# 沼津美術研究所について

上席学芸員 植松 篤

沼津美術研究所と聞いて、ピンとくる読者の方は多くはないと思う。以前、筆者が静岡新聞に寄稿した文章で「ストレイツ展」(一九八三―一九八八年)を紹介したが、その展覧会を企画、出品したのが沼津美術研究所の研究生達だった。作家の卵の、さらにその前の段階のような研究生らの活動という点で興味もち、取り上げたという経緯がある。本稿では、静岡県東部における美術の環境を整えた存在の一つとして、沼津美術研究所を取り上げたい(図1)。

沼津美術研究所は、美術家の青木一香

〔洋子〕(一九四二年)が一九六八年に設立した、美大受験に対応した美術教育機関である。青木によると、ある日高校生がデッサンを見てほしいと訪ねてきたことが設立のきっかけとなったようだ<sup>3</sup>。当時、静岡県東部に美術受験のための予備校となる教育施設はなく、青木はその必要性を感じたのである。研究所の所在は沼津駅前の商店街の一角にあり、当初はビルの三階を使用していたが、後に二階まで拡大した。講師は青木の他、浜松出身の洋画家、鈴木康夫(一九四三年)が勤めた。卒業生は一二〇〇人に登り、受験指導は二〇一〇年をもって終了した<sup>4</sup>。

当時の静岡県は、美術受験のための環境が整っておらず、沼津美術研究所が設立された同じ年に、静岡中央美術研究所(静岡市、一九六八年)もできたという状況であった。あるいは他にも個人で指導している所があったかもしれないが、県内に広く宣伝されたものではないだろう。進学希望者が県西部に在住であったなら、名古屋の研究所に所属することもあったかもしれない。後には、静岡県内に富士美術研究所(富士市、一九七八年)、アステール総合美術研究所(三島市、一九八四年)、東京芸術学院静岡校(静岡市、一九八七年)などができる。富士美術研究所とアステール総合美術研究所は、沼津美術研究所出身者によって設立されたもので、沼津美



図1 沼津美術研究所入口外観 提供：長橋秀樹

術研究所が当県における美術環境の充実に寄与したとも言えるだろう。

時代を遡って美術学校へ入学するための予備校について触れると、戦前には美術講習所(一九〇一年)<sup>7</sup>、太平洋画会・仮研究所(一九〇四年)などが存在していた<sup>8</sup>。とは言え、やはり戦後になってこの種の教育施設が増大した。ここでは詳しくは述べないが、阿佐ヶ谷洋画研究所(一九四五年)、後に阿佐ヶ谷美術学園を経て阿佐ヶ谷美術専門学校に改称、御茶の水美術研究所(一九五六年)、後に御茶の水美術学院に改称、すいどうばた洋画会(一九六五年)、後にすいどうばた美術学院に改称)などが先駆的な存在である。

## 現代美術研究所

開所～4月16日  
規則書20円切手郵送申込

川口軌屋教室 脇田 和教室  
福沢一郎、鳥海青児、  
佐野繁次郎、宮本三郎、  
山口 薫、植村鷹千代

① 個人教授式(フランスエコールの如し)  
② 三ヶ月に一回合評コンクール  
(コンクール後入選展覧会あり)  
③ 本研究所学生は午前中教室開放  
個人研究は自由  
④ 裸体モデル使用

所長 植村鷹千代  
理事長 福沢統一

申込先 近代造型内TEL 697805  
現代美術研究所創立事務所  
東京都港区田村町一ノ五

NHK  
日産館  
日本石油  
モーター  
プール  
至北谷  
至新橋  
至電ノ門  
至田村町一ノ五

図2 『美術手帖』140号、美術出版社、1958年4月、P.162

こうした受験に特化した予備校とは異なる美術教育機関もある。その種の一つが、青木が学んだ現代美術研究所(東京、一九五八年)である。この研究所の開所時に『美術手帖』誌に掲載された広告(図2)には、所長を務める評論家の植村鷹千代(一九二―一九九八年)をはじめ、講師陣には、川口軌屋(一九九二―一九六六年)、福沢一郎(一九八―一九九二年)、佐野繁次郎(一九〇―一九八七年)、山口薫(一九〇七―一九六八年)、脇田和(一九〇八―二〇〇五年)、鳥海青児(一九〇二―一九七二年)、宮本三郎(一九〇五―一九七四年)といったそうそうたる芸術家の名前が並んだ。一

九六〇年に入所した青木は、ここには名が挙がっていないが、田口安男（一九三〇（二〇二四年）に多くを学んだようだ。

また、同広告には、「①個人教授式（フランスエコールの如し）②三ヶ月に一回合評コンクール（コンクール後入選展覧会あり）③本研究所学生は午前中教室開放 個人研究は自由④裸体モデル使用」とあり、これらが特徴、アビールポイントだったことがうかがえる。

こうした戦後の研究所についてはあまり言及されてこなかったが、評論家の三木多聞（一九二九（二〇一八年）が、実技研究所（学校、私塾、サークル以外の美術を教える場がこのように呼称されていたようだ）の典型例として、三ヶ所を取材している。その一つが現代美術研究所で、他の二つは受験予備校である阿佐ヶ谷洋画研究所、趣味的な範疇での参加が主となる東京都美術館のデッサン会である。三木は現代美術研究所を「自由な研究の場」として紹介している。三木は、現代美術研究所には学ぶ場を持っているはずの美大生も通うことから、美術大学での教育の問題へとつなげている。また、受験目的の入所は認められていないこと、優れた新人の育成が目的であることを伝えており、この点が受験予備校との違いを表していると言えるだろう。<sup>10</sup>

右記に挙げたとおり、現代美術研究所では、自由に制作する環境や発表の機会

を提供していた。青木は、その後東京藝術大学に入学することになるが、研究所の者たちと、入学前から、そして入学後も共に作品発表をしていた。<sup>11</sup> 現代美術研究所による、こうした自由な研究や発表の機会の提供は沼津美術研究所にも引き継がれたと言える。実際に沼津美術研究所の場合も、研究生の作品を披露する展覧会が開催されている。<sup>12</sup> また、冒頭の「ストレイツ展」に参加した美術家の長橋秀樹（一九六三年）が研究所に通っていた頃、受験勉強だけでなく、自由な制作としてインスタレーションなども制作していたという。<sup>13</sup>

『美術手帖』誌の美術学校案内の特集では、沼津美術研究所の沿革・特色の項目に「美術を通して人格および将来性のある若い人達への手助けを目的とし、より健全な精神を育成するための場としての役割を果たしたい」とある。もちろん受験予備校としての側面は有しているが、そうした点でのアビールはあまりせず、美術研究所としてのやや抽象的な理念を掲げている。閉所時の新聞による取材においても、青木は「合格がゴールではない。表現者として何をしたいのか、そのために何をなすべきかを自分で考える力こそ大事」と答えている。

沼津美術研究所は決して大手予備校のような規模ではなかったが、その活動は、富士美術研究所、アステール総合美術研

究所や、すでに閉廊したがDHARMA沼津といったアートのスペースへと繋がった。そうした点で、当県の美術環境の歴史を辿る上で重要な存在と言えるだろう。

- 植松篤「アートのほそ道」1980年代県内アート「編」4完、「静岡新聞」二〇二四年三月二二日
- 二〇二二年に雅号を青木洋子から青木一香に変更した。
- ふじ・紙のアートミュージアムで開催されたアーティストトークでの発言（二〇二四年七月一日）。
- 無記名「表現者育て41年『沼津美研』青木洋子さん主宰 1200人卒業、歴史に幕」『静岡新聞』二〇一〇年一月二九日
- 無記名「受験予備校（中部）」（特集「アート・スクール・ガイド1995美術+デザイン+映像」『美術手帖』六九二号、美術出版社、一九九四年七月増刊号、四〇五頁
- 名古屋にはサロンド・ジュワン名古屋研究所（後にグループ核研究所に改称）やヴィーナス・アトリエ（後に、ヴィーナス美術研究所、ナゴヤ・アート・スクールの改称）などがあつた（無記名「研究所」（年鑑『美術手帖』一八四号、美術出版社、一九六一年一月増刊号、一〇三頁、無記名「研究所」（年鑑『美術手帖』三〇八号、美術出版社、一〇〇頁）。
- 『東京芸術大学百年史 東京美術学校篇 第一巻、ぎょうせい、一九八七年、二〇二（二〇四頁）（オンライン版 <https://gcmagedata.jp/y100/>）（二〇二五年七月二七日参照）
- この段落については主に下記の資料による。荒木慎也『石膏デッサンの100年—石膏像から学ぶ美術教育史—、アートタイパー、二〇一八年、一九〇（一九四頁
- 三木多聞「ごぞんじですか実技研究所というところ」『美術手帖』一九三三号、美術出版社、一九六一年九月、一一四（一一八頁
- 同書参照。もつとも一九六八年頃には別科として進学コースが設定された（『研究所』（年鑑『美術手帖』三〇八号、美術出版社、一九六九年一月増刊号、九九頁）。
- 筆者の青木氏へのインタビューによる（二〇二五年四月一四日）。
- 「高校生の油彩画など力作400点」沼津『静岡新聞』一九九八年三月二二日
- 筆者の長橋氏へのインタビューによる（二〇二四年三月六日）。
- 無記名「研究所その他」（美術学校案内）『美術手帖』四七三三号、美術出版社、一九八〇年十一月増刊号、三四一頁
- 前掲書4



## 本の窓

今村信隆 著  
「お静かに！」の誕生  
近代日本美術の鑑賞と批評  
文学通信 二〇二五年

当館は、毎週水・土曜日を「フリートールキング・デー」として、展示室で自由に話しながら鑑賞することを推奨しています。このような試みは広く行われていますが、そもそもどうして美術館では、話すことが制限されているのでしょうか。本書では、明治期以降の日本でいかにして美術の鑑賞や批評の場が形成されていくのか、「声」と「語り」をキーワードに様々なエピソードが紹介されています。特に、雑誌『白樺』の同人たちが求めた「美的鑑賞における沈黙」と「親しい者同士の語らいによる鑑賞の愉しみ」は、美術館の鑑賞空間を再考する上で重要な要素になり得るでしょう。著者による姉妹編『お静かに！』の文化史（文学通信、二〇二四年）の併読もおすすめます。

（主任学芸員 古家満葉）

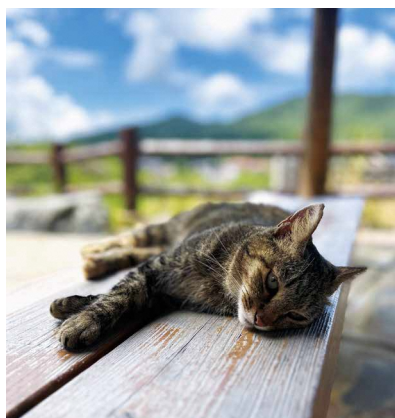


## 「巡礼」からはじまった

主任学芸員 古家満葉

はじめまして。この春より学芸課に着任いたしました古家満葉と申します。前年度までは五年ほど、長野の県立美術館で学芸員を務めました。専門は日本近代美術（特に版画）です。出身は東京……といってもだいたい西側の練馬区に育ち、アスファルトの熱と化学スモッグにまみれた夏を過ごしてきました。この原稿を書いているのは残暑厳しい折でして、駿河は海が近いからか「いかにも日本!」といった蒸し暑さを肌身にかけています。

湿り気を帯びた静岡の夏を過ごしていると、ブルーストの小説『失われた時を求めて』に登場する有名なマドレーヌの場面のよう思い出されることがあります。それは、かれこれ十数年前、卒論のテーマも決まらず、就職活動もしていなかった大学最



猫歩きにハマっています。写真は長崎・雲仙にて（8月撮影）

後の夏休み。ひとり熱海を訪れたときの記憶です。日本の地域研究を専攻していた私にとって、美術館は、観光ついでや友人に誘われたら立ち寄る程度の、今より少し遠い存在でした。そんな私は、当時追っかけていた隣国の某アイドルがミュージックビデオを撮影したと聞いて、何気なしに熱海の私立美術館を訪れます。そして、ひとしきり「聖地巡礼」をした後、美術館のショップで手にした洋画家・吉田博の画集を契機に、あれよあれよという間に、「日本」が形作られていく近代美術の世界にのめり込んでいくのでした。どことなく潮風の気配がする熱気を感じると、美術館から帰るバスの中でめくった本の感触がよみがえります。

自分の経験も踏まえて常々思うのは、美術に興味を抱いたり、美術館に足を運んだりするきっかけは、人それぞれだということです。当館のロダン館も、近年だと乃木坂46「考えないようにする」(二〇二三)のミュージックビデオのロケ地となり、「巡礼」する来館者も時おり見受けられます。展示や研究はもとより、広く親しみをもってもらえる美術館になるよう、広報普及活動にも励んでいけたらと思います。これから何卒よろしく願っています。

## 利用案内

開館時間：10:00～17:30(展示室への入室は17:00まで)  
休館日：毎週月曜日(月曜祝日・振替休日の場合は開館、翌日火曜日休館)  
年未年始  
※詳細はウェブサイト等でご確認ください。

## アクセス

- ◎JR「草薙駅」県大・美術館口から静鉄バス「県立美術館行き」で約6分
- ◎静鉄「県立美術館前駅」から徒歩約15分またはバスで約3分
- ◎東名高速道路 静岡IC、清水ICから約25分 日本平久能山スマートICから約15分
- ◎新東名高速道路 新静岡ICから約25分

ウェブサイト：<https://spmoa.shizuoka.shizuoka.jp>

※イベント等は都合により変更になる場合があります。



〒422-8002 静岡市駿河区谷田53-2

企画総務課/Tel 054-263-5755 Fax 054-263-5767

学芸課/Tel 054-263-5857 Fax 054-263-5742



静岡県立美術館

Shizuoka Prefectural Museum of Art

つながる、次へ

## 「金曜ロードショーとジブリ展」のご案内

## 展覧会情報

2025年10月11日(土)～2026年1月4日(日)

開館時間 10:00～17:30  
(展示室の入室は16:30まで)

夜間開館 10:00～20:00  
(展示室の入室は19:00まで)

夜間開館日 毎週土曜日、10月12日(日)、11月2日(日)、23日(日)、1月2日(金)～4日(日)

休館日 毎週月曜日(祝日、振替休日と12月29日は除く)、12月30日(火)～1月1日(木)

## チケットについて

- ・館内でのチケット販売はございません。
- ・日時指定券(土日祝、年未年始)、平日券(平日であればいつでも入場可能)をオンライン予約サイト「アソビュー!」またはローソンチケットにて事前にお買い求めください。
- ・チケットの転売は固くお断り申し上げます。

## 来館方法について

- ・公共の交通機関をご利用ください。
- ・駐車場は混雑が予想されます。状況によっては、ご予約の時間に間に合わない可能性もございます。

## 館長美術講座

日時：11月24日(月・祝) 14:00～

会場：当館講堂

講師：木下直之(当館館長)

※「金曜ロードショーとジブリ展」会期中は、収蔵品展は開催いたしません、ロダン館はご覧いただけます。